オーディオ実験室収載

アナログアキュライザーの活用(25)
－DSD 録音(10)－

１． 始めに

前報(24)のダイレクトカッティング盤に引き続き、往年の高音質盤の DSD 録音を実施します。

２． アナログアキュライザーの適用と録音および試聴方法

音源は、LINN LP-12 によるアナログ再生とし、次のルートでの再生と録音を行います。

LP-12→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→
P&G フェーダー→AACU-1000→DA-3000

DA-3000 には GPS-777 から 44.1KHz のクロックを入力します。

今回の録音対象は下記のアナログ盤です。

harmonia mundi VIC-20079　ラ・フォリア
グレゴリオ・パニアグワ指揮アトリウム・ムジケー古楽合奏団

＜曲目＞

1、生命の泉
2、途方もなき ～微小なる栄光の～
3、フォリアに寄せる祈り ～名声は飛んで行く～
4、肝要なる・根源的
5、貴族的倹約
6、繊細なる ～深き淵より～
7、壁の外に
8、通俗的なる

9、人々に知られざる ～そこはかとなくやわらかき ～
10、北欧的にして 荒涼たる ～平凡にして 金色なる ～
11、いとも高貴なる ～退嬰的かつ退廃的なる ～
12、牧人らの～数学的：怒りの日 ～黄昏の～
・オリジナルレーベル：harmonia mundi
・制作：Speakers Corner Records
・録音：1980 年 6 月
・規格：33rpm 180g LP Stereo
通称「長岡 A 級外盤」の一つとして有名な「古代ギリシャ音楽」に負けない優秀録音であるとオーディオ評論家の故長岡鉄男氏が絶賛したレコードです。
故長岡鉄男氏のアナログ盤の記事はよく読んでおり、「古代ギリシャ音楽」は持っていませんが、本盤と「アラブとアンダルシア音楽」の盤を持っています。

３．アナログアキュライザーの適用と録音および試聴結果
fidata HFAS1-S10 収納の録音音源再生を元のアナログ盤再生と比較して聴いていきます。
写真でみるとおり、アトリウム・ムジケー古楽合奏団は、バロックに先立つ中世の楽器の演奏集団です。それらの音色は、ほとんど演奏会で聴く機会がありません。

演奏はジャケットの解説に、「怪にして快」とあるように、極めてまれな音楽を奇々怪々と奏でています。
アナログ盤は、個々の楽器の音の立ち上がりの鋭さ、余韻の長さや奥行き感、定位の確かさなど、総じて生生しさが、オーディオチェック用として推奨されるだけのことがあります。現在でも、長岡 A 級外盤の中古サイトがあるくらいです。
DSD 録音音源では、元のアナログ盤の表現をかなりの程度再現していますが、アナログ盤が特異的に高音質であるだけに、忠実に再現できているかと言えば、届かないところがあります。このことは、前報(24)までのダイレクトカッティング盤の録

音についても言えることです。

４．まとめ

往年の高音質盤を DSD 録音するにあたり、アナログアキュライザーを再生経路中 3 箇所投入した結果、格段の副作用は見られず、元のアナログ盤の質が特上であるだけに完全な再現までは至っていませんが、劣化の程度は以前より抑制されてきていると判断されます。

以上